

Aug. 2017

ZENBI

全国美術館会議機関誌

August 2017 [Vol.12]

2	[北海道] たまには足踏みして、“展覧会”のことなど、考えてみる 鎌田 享
4	[東北] 震災5年、足下を見つめなおす 吉田尊子
6	[関東] 地域、社会と向きあって、それぞれの応答 中尾英恵
8	[東京] 東京にて、美術展を眺めて 徳山拓一
10	[北信越] 北陸新幹線と美術館 石堂裕昭
12	[東海] アートが社会の中で語りはじめる時 廣江泰孝
14	[近畿] 調査と集積と 新谷式子
16	[中国] 鳥取県立美術館建設場所決定と地元で愛された作家たち 今 香
18	[四国] コレクションと人 安達一樹
20	[九州] 連なりのうちに見えた熱さと苦さ 西本匡伸

22	—— 苫小牧市美術博物館
23	—— 東根市公益文化施設 まなびあテラス
24	—— 葦崎大村美術館
25	—— 大田区立龍子美術館
26	—— 郷さくら美術館
27	—— 安曇野山岳美術館
28	—— (公財)水野美術館
29	—— 熊本県立美術館

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 32

会員の呼称について 33

投稿要領 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35



デジタル高精細撮影への転換 4"×5"から無限大へ。

NISSHA はデジタル高精細撮影の無限の可能性を追求しています

従来の「4×5」ポジフィルムよりも高解像度なのにリーズナブル。
印刷用に画像分解する必要もなく、また色褪せることもありません。



最大 28 億画素まで。データ活用にあった仕様で撮影
赤外線高精細デジタル撮影が可能
豊富な国宝・重要文化財のデジタルアーカイブ実績
文化財、美術品のあるところ、どこでも出張撮影

NISSHA

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

東京都港区大崎 2-11-1 大崎ウィズタワー TEL: 03-6756-7506 担当: 深瀬・山口
大阪市中央区淡路町 1-7-3 日土地堺筋ビル TEL: 06-6232-2714 担当: 和田・石濱

たまには足踏みして、“展覧会”のことなど、考えてみる

鎌田 享(かまた たかし・北海道立近代美術館)



例年、冬になると北海道は、雪と氷に閉ざされる。という盛り過ぎなのだが、札幌では11月には初雪を観測、本格的な冬の訪れが感じられる。そして雪解けは、翌年の3月。となるとどうしても、人々の外出は控え気味になる。

暖かな季節に大規模展が頻出することは全国的なことだが、特に北海道では“近年”その傾向が色濃い。美術史上の著名作家や知名度の高い美術館に焦点をあてた、集客力の高い展覧会は夏場に集中。一方の冬場はというと、美術館や学芸員の個性が発揮された展覧会、地元の作家を取り上げた回顧展…そうした企画力がかきまわると輝く展覧会の出番となる。

「野又圭司展 脱出〜困難な未来を生きるために〜」(本郷新記念札幌彫刻美術館、2016年10月5日〜12月4日)、「柿崎 照 森の奥底」(札幌芸術の森美術館、1月28日〜3月26日)といった、現在進行形で旺盛な制作活動を展開する作家の個展が目をつけた。

これに加えて、所蔵作品を清新な視点から紹介する展覧会も、かずかず開催された。色をテーマにしながら子どもや家族で楽しめる内容を目指した「ワンダー☆ミュージアム2017 キャッチ・ザ・カラース」(北海道立近代美術館、2016年11月23日〜4月9日)、こちらも色や形態に着目しながら平面作品を紹介した「色と形みるあそぶ〜色と形のポリフォニー 平面の魅力」(北海道立旭川美術館、1月17日〜4月9日)、19世紀から現代にいたるポスター・

コレクションを展示した「グラフィック・デザインの100年」(北海道立帯広美術館、2016年12月10日〜3月23日)。いずれも工夫を凝らした好企画であり、担当学芸員の努力は評価されるべきなのだが…その背景にある状況を考えてみると、ただただ称揚すればすむものでもない。

所蔵作品は、美術館の根幹。そのコレクションを、研究成果を踏まえながら新たな視点で紹介し続けていくことは、美術館活動の本道である。しかし、本誌をご覧のみなさんならばお察しのとおり、コレクション活用背景には、活動予算の漸進的な削減がある。

“金が無いなら、知恵を絞れ”とは、その通りだろう。だからこそ学芸員は、コストを比較的抑えられる所蔵作品の利用に、活路を見い出そうとする。しかし、コレクションを掘り下げるためには調査経費が必要だし、それを展示として十全に展開するためには、例証するための参考作品・参考資料の借用、あるいは文書や画像によるきめ細かい解説物の作成が必須となる。“金が無ければ、身動きが取れない”のも、また確かなことなのだ。ましてその状態が10年以上にわたって続こうものならば…現場の疲弊感や無力感(というよりは脱力感)は、はかりしれない。

首都圏で開催される大規模展は、報道各社向けの事前案内、一般観覧者への周知・宣伝、展覧会に付随するグッズ類の企画・開発、有名人のオフィシャル・サポーターへの起用など、華々しい限り。ときに数十万人の観覧者をあつめる大型展は、“興行”

として洗練の極地を迎え、ひとつの経済活動として成熟を遂げた観がある。しかし、それと表裏をなすように、上記のような展覧会実施状況が生じているのも事実なのだ。

札幌市内にある北海道立三好太郎美術館は、前身となる北海道立美術館の開館から数えて今年で50周年、現在の建物に移転してからでも築34年を迎える。この20年にわたり断続的に改修工事を実施、2016年度には外構の補修・整備を行い、続いて今年度は展示室の拡張など内部の改修に取り掛かる。またこれは美術館施設ではないのだが、札幌中心部では来年10月のオープンを目指して、札幌市民交流プラザの建設が急ピッチで進められている。これは、延床面積37,000㎡、地上9階建てのビルのなかに、劇場・図書館・文化芸術交流センターという三つの機能を備えた複合文化施設である。

老朽化しつつある建物の改修、新たな機能を備えた施設の新築。美術・文化活動の充実という点

からは喜ばしい話題なのだが、あえてひねた視線を向けてみると…実はどちらも、美術・文化以外の“役割”も期待されているのだ。三好太郎美術館は、全北海道を視野に入れた交流拠点、そして札幌観光の拠点としての機能拡充が求められている。一方、札幌市民交流プラザは、札幌市街地再開発の象徴としての側面を備えている。

展覧会が、“興行”としての側面を備えていることは、いまさら言うまでもない。公立美術館の活動が、地方公共団体の財政状況や多角的な行政施策と不可分であることも、自明の理である。そして社会全般の価値観や在り方が、時代の移り替わりとともに変遷していくなか、美術館に求められる役割や機能が広がっていくことも、至極当然のこと。

そんなことは重々承知のうえで、もう少し落ち着いてくれないものかと…思ってしまう。とはいえ、作品があり、それを観る人がいるのだから、美術館や展覧会は、たぶんこの先も存在し続けるのだろう(たぶん)。さて、次回展の準備に戻ろうか。



札幌芸術の森美術館「柿崎 照 森の奥底」展 会場風景



北海道立近代美術館「ワンダー☆ミュージアム2017 キャッチ・ザ・カラース」展 会場風景

震災5年、足下を見つめなおす

吉田尊子(よしだ たかこ・岩手県立美術館)

この原稿を執筆している4月も半ばを過ぎた現在、岩手県では桜が見ごろを迎えようとしている。東北では冬が長い分、春の訪れは生命の息吹を肌で感じられ、心から嬉しく感じられるものだ。と同時に、春先のこの季節は、3月のあの日のことのおのずと思い出される。昨年4月の熊本地震のことも記憶に新しい。春の深まりを目の当たりにしながら、本格的な復興に向けて、私たちの立場で何ができるのか、改めて考えさせられる。

さて、昨年10月からこの4月までの半年間の東北ブロックの美術館の活動を振り返るとき(とはいっても筆者が実際に拝見できたものはごくわずかであることにご容赦願いたい)、やはり東日本大震災から5年目、というくりでの展覧会や活動がいくつか見受けられた。また、各地各館で、地元ゆかりの作家の展覧会が多く開かれたような気がする。

筆者が勤務する岩手県立美術館では、2016年の秋に「2016年のIMA(いま)」(9月3日～10月16日)という、地元の現代美術家を取り上げたグループ展を開催した。これは、震災の年に企画展予算引き上げという状況の中で開催した「アートのチカラ、いわてのタカラ」と銘打った一連の活動のうち、県人作家の協力を得て開催した「'70、'80年代生まれの美術家たち、IMA(いま)ここで」展、「私たちがIMA(いま)在ること—7人の現代美術家たちによる」展の後に続く企画として開催したもの。震災から5年ということは言わずもがなとして、特にテーマは設けず、学芸員が各自推薦した作家7人

により構成した。表現の方法はそれぞれだが、岩手、東北の自然や風土に根差した制作を旨とする作家が多く集まったのは興味深いことであった。

時を同じくして、福島県立美術館で「被災地からの発信 ふくしま 3.11以降を描く」展(2016年9月10日～10月10日)が開催された。“3.11以降、被災地から”というスタンスを明確に打ち出している企画であり、また出品作家、作品のセレクトも、展覧会企画者によるものという点で岩手とは対照的である。この展覧会は、震災とその後の福島の状況をテーマに制作している作家7人の作品75点を展示し、作家たちが現状をどのように捉え、自己の表現に結びつけようとしているかに焦点を当てる、というもの。福島においてはやはり原発事故をテーマにしたものが多く、表現が直接であれ間接であれ、怒りや不安を感じさせる。地元の作家たちによる震災をめぐる表現については今後10年、20年と長いスパンで見えていく必要があると企画者は言う。被災地域の地元の美術館としての使命を宣言するかのよう展覧会であった。

また福島発の「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」が活発な活動を見せた。企画展「アートの伝える考える 福島の今、未来」を、福島県内のみならず、昨年春の大地震で被災した熊本県をはじめ、他県のミュージアムと協働して展開、情報発信に努めた。いまや日本ではどこで大災害が起きてもおかしくない状況のなかで、福島からモノや人が出かけて行って、現地の人びとを巻き込み、語り

合い、福島の問題を参加者自身に引き寄せて考える機会を作り出しているという活動の意義は大きい。同プロジェクトは福島県立博物館を事務局として2012年に発足、文化庁の支援により活動しているが、2017年も引き続き、県域のみならず国内での幅広い活動が期待される。

宮城県の気仙沼市のリアス・アーク美術館では、2013年以降、震災資料を常設展示して、被災の記憶を風化させないよう、問題意識を喚起し続けている。同館の山内宏泰氏は、被災地域で展開される様々な活動にも最近では変化がみられるとして、「震災を伝えることは、地域の未来や命に関わること。正しく伝えていかなければいけない」と語る。

さて、話題を変えてみると、東北各県では、地元ゆかりの作家の展覧会が相次いでいる。青森県立美術館では「生誕80周年 澤田教一：故郷と戦場」(2016年10月8日～12月11日)展、岩手県立美術館では「生誕130周年記念 五味清吉展」(2016年12月23日～2月19日)につづき、「没後90年 萬鐵五郎展」(4月15日～6月18日)が開催され

た。特筆すべきは、本展は盛岡市の県立美術館と花巻市にある萬鐵五郎記念美術館の二館が初めて共同で開催するという点。両館での割引制度も整えた。宮城県美術館では収蔵品による「コレクション再発見 東北の作家たち 洋画/版画」(4月29日～7月17日)展が開催された。なお近隣の学芸スタッフが集まってコレクションについて話し合うイベントも予定されている。山形美術館ではゆかりの現代作家による「場所と記憶 永岡大輔×千葉奈穂子」展(2016年10月14日～10月30日)が、秋田県立近代美術館では「生誕150年 寺崎廣業とその時代」(2016年12月3日～2月5日)が開催された。

番外として。全国美術館会議正会員ではないが、仙台市博物館は昨年に開館55周年を迎え、この10年の収集活動の成果を紹介する「伊達な優品勢ぞろい Part II」(4月21日～6月4日)が開催された。長きにわたる博物館活動に敬意を表しつつ、我々も地域に根差した息の長い活動を続けていきたい。

※被災地の芸術家、伝え方に苦悩 「自分の経験として感じて」『日本経済新聞』ほか 2017年4月18日付



山本英治「いわての手」 「2016年のIMA」 会場風景 2016年 (盛岡市中央公園)



トークイベント「つなぐ未来—熊本・福島—」の模様 2月12日 熊本県豊北郡津奈木町のつなぎ美術館にて

地域、社会と向きあって、 それぞれの応答

中尾英恵 (なかお はなえ・小山市立車屋美術館)



栃木県の位置から、この半年を振り返ると隣接する周囲の県が賑やかであった。「茨城県北芸術祭」(2016年9月17日～11月20日)と「さいたまトリエンナーレ」(2016年9月24日～12月11日)という新たな芸術祭の開催、太田市美術館・図書館の開館があった。茨城が「海か、山か、芸術か?」と題し、越後妻有地区の約2倍の広大なエリアに、観光スポットを取り込みつつ展開されたのに対し、埼玉では、「未来の発見!」をテーマとし、生活都市を舞台に開催された。市議会でやり玉にあげられる等、何かと後ろ向きな話題が先行したように思えた埼玉だったが、私が会場で遭遇したのは、派手ではない生活圏内の他に例をみない無料での開催の功績であった。旧民俗文化センターの中庭に敷き詰められた枕のインスタレーションを前に、4回目にしてやっと何で枕が置いてあるのかが分かったというおじいさんが、初訪問の知人らしきおじいさんに「枕」について語っていた。3回分からなかったのに諦めなかったおじいさんは、「分かるには勉強がいるんだよ」と話していた。安易とすら感じることもある「分かりやすさ」が求められる傾向にある現在、このおじいさんの分かろうとする姿勢は、希望のように感じられた。

平田晃久氏の初の公共施設となり、建築界から注目を集める太田市美術館・図書館の一つのコンセプトに「目的のない時間を過ごす広場」がある。「まちに開かれた公園のような美術館」として誕生した金沢21世紀美術館に代表される21世

紀型的美術館である。車社会の地方都市では、ふらっと過ごせる場所が意外と少ない事を痛感する事があるため、このコンセプトが今の時代を的確に捉えたものであり素晴らしい事だと思っただ、「目的をもった場所」とされる美術館のフレームを解体し、どのように「目的のない時間」を過ごそうと思わせる場所に構築していくのか注目をしていた。区切りがなく、なだらかに空間が繋がっていくことで、川辺を散歩している途中で少し座って休憩するような地続きの体験を作り出している建築であった。その中にある区切られた有料スペースとしての美術館の運営を考えると、なかなかの舵取りの難しさがありそうだ。地元の詩人・清水房之丞の言葉を起点に「未来への狼火」(4月26日～7月17日)と題し、太田市にゆかりのある作家や太田市を素材にした作品等、地域に立脚し、美術以外の詩や歌をも取り込んだ、入口の多い開かれたグループ展から始められた。

そうした中で、美術館の(通常の)企画展に目を向けると、横浜美術館では、非欧米圏に出自を持つアーティストによる政治的・社会的に作り出された身体を扱った「BODY/PLAY/POLITICS」(2016年10月1日～12月14日)が開催された。興隆する芸術祭では、見受けられないジェンダー的視点と展示構成力が際立っていた。アーツ前橋では、地域内に生きる同じ表現者でありながら、交わる事がほとんどないであろう(むしろ対立することもあろう)公募団体や市民展等を活動先と

している作家と現代美術のフィールドで活動している作家に、学芸員を加えた実行委員会で、2年に渡る対話を重ねて「前橋の美術 2017～多様な美との対話～」(2月3日～2月26日)が開催された。それに続いて、今年で80歳になる作家の紛失した作品の再制作から最新作までを展示した「加藤アキラ[孤高のブリコロール]」(3月18日～5月30日)と地域に根ざした独自性の高い展覧会が光っていた。

また、神奈川県立近代美術館では、砂澤ビッキの本州の公立美術館での初個展となる「木魂を彫る 砂澤ビッキ展」(4月8日～6月18日)が開催された。没後28年での開催となった本展には、開催の意義深さと共に、いま、これからの課題を教えられるようでもあった。益子陶芸美術館では、初めての陶芸以外の展覧会として、益子を活動拠点とする染織家の作品を展示した「エセルに誘われて…日下田正とエセル・メーレ」(2016年10月30日～1月29日)が開催された。益子の陶芸を

取りまく状況の変化等に意識的に、今の時代の陶芸美術館の在り方を考えたひとつの展覧会であった。

当館では、インディペンデント・キュレーターの遠藤水城氏を招いて「裏声で歌へ」(4月8日～6月18日)が開催された。地元の中学校の合唱コンクールや戦争柄着物、2014年に不慮の事故で亡くなった國府理の《水中エンジン》の再制作品と若手のアーティストの新作による展示である。地方にある小規模美術館として、何ができるだろうかと考えた際に、外部キュレーターの企画を取り入れ、実験の場所としての側面を持つことの可能性を考え、今年度は、秋にもインディペンデント・キュレーターの服部浩之氏による企画展「田村友一郎|服部浩之 [試論：栄光と終末、もしくはその週末 / Week End]」(9月17日～11月23日)を開催予定である。どの美術館も企画展も、今を取りまく様々な状況に対して、各々の位置から真摯に応答しているのを感じた半年間であった。



「さいたまトリエンナーレ」会場風景 (旧民俗文化センター)



太田市美術館・図書館

東京にて、美術展を眺めて

徳山拓一（とくやまひろかず・森美術館）



2016年4月に森美術館へ移籍するまで、私は、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAで学芸員として4年間働いていた。本報告の対象期間となっていた2016年10月から2017年4月は、東京へ引っ越してきてから半年が過ぎた時期と重なっており、東京に対して外側からの視点と内側からの視点が入り混じっていた頃だった。ここでは、移行期の視点で東京ブロックで開催された美術展を眺め、この地域で展覧会企画をしてゆくことについて考えたことを書きたい。

2016年10月から2017年4月の期間、東京ブロックでは質が高い展覧会が数多く開催された。結果的に絵画展ばかり訪れてしまったが、その中でも見応えあったものの一部を列挙すると、「シャセリオー展 19世紀フランス・ロマン主義の異才」（国立西洋美術館、2月28日～5月28日）、「エリザベス ペイトン：Still life 静／生」（原美術館、1月21日～5月7日）、「ゴールドマン コレクション これぞ暁斎！ 世界が認めたその画力」（Bunkamura ザ・ミュージアム、2月23日～4月16日）、「ミュシャ展」（国立新美術館、3月8日～6月5日）、「草間彌生 わが永遠の魂」（国立新美術館、2月22日～5月22日）、「大エルミタージュ美術館展 オールドマスター 西洋絵画の巨匠たち」（森アートセンターギャラリー、3月18日～6月18日）などがある。東京に住むようになり、これだけの展覧会に毎週のように行けるようになって改めて思ったのは、開催される美術展の多様さと質の高さだった。さら

に、ほとんどの展覧会が多くの観衆を動員していたことにも驚いた。オールドマスターの展覧会に入場者が集中することや、文化事業の東京への一極集中傾向などの批判はあるとしても、これだけ多くの人が美術展を訪れることは、日本人の美術への関心の高さを示しているものとして、ポジティブに受け取ることもできるのではないだろうか。

特に印象に残った展覧会として「endless 山田正亮の絵画」（東京国立近代美術館、2016年12月6日～2月12日）に触れたい。本展は山田正亮の最大規模の回顧展で、山田の「制作ノート」を参照した作家に寄り添った丁寧なキュレーションは、濃密な絵画世界を解りやすく紹介する充実した内容となっていた。本展が印象に残ったのは、展覧会の内容以外に、個人的な出来事が理由になっている。

同展が京都国立近代美術館へ巡回していた4月5日のことだった。ニューヨークに住む友人から突然連絡があり、「endless 山田正亮の絵画」展を観るため4月6日に日本に来るのだ、という。それも、前日の夜にオンラインで山田の作品を初めて知り、会期最終週だったこともあり、急遽航空券を手配したらしい。仕事が多忙であることから、展示を観て同日に帰国する予定とのことだった。翌日、京都にいるその友人から電話があり「展覧会は素晴らしかった。どうしてもキュレーターに会いたいから、アポを取ってほしい。」とのことだった。すでに新幹線で東京に向かっており、帰りの飛行機はキャンセルしたとのことだった。キュレーターの中林和雄氏

（東京国立近代美術館副館長）とは面識がなかったが、失礼を承知で突然連絡をしたところ、ご快諾頂き、無事二人を引き合わせる事ができた。その日の夜遅く、数年ぶりに会った友人の表情は充実感に満ちていた。山田の作品の素晴らしさと、企画の充実さを興奮気味に語り、ニューヨークで山田正亮展を開催することを目標にしようと言っていた。そんな姿を眺めながら、『展覧会は本当に色々な可能性に溢れているんだな』と思っている自分がいた。初心に帰ったような、新鮮な気持ちになった。

東京に来て、以前に比べて大きな組織で働くようになり、展覧会を企画をする上で考慮すべき懸念事項は圧倒的に増えた。昨今の観光重視の行政政策、来場者数に偏重した評価、美術館の資金不足など、美術館を取り巻く現状は複雑である。時代の空気なのかもしれない。ミュージアム・スタディも進む中、美術展企画者として美術館運営に関する様々な要素を複合的に考えることは必須であるこ

とも理解している。しかし、同時に「時代の空気」が企画者に内面化することで、実験的な意識が萎縮してしまい、大衆に迎合するような展覧会ばかりになってしまうことは、美術館の存在意義として本末転倒ではないだろうかとも考える。観客の既知の知識や経験、感覚で受容できる表現だけではなく、未知の表現を通じ、今すぐには理解できないかもしれない価値のある深い経験を提供することは、芸術文化の発展に寄与するという美術館の重要な役割の一つだと考えるからだ。

東京で開催された数々の素晴らしい展覧会と、そこに押し寄せる観衆を眺めながら、私はどこかで物足りなさを感じていた。その理由が何かは、はっきりとは解らない。ただ、私は現代美術を専門とし、いまに生きるアーティストに並走しながら展覧会を作るタイプのキュレーターであるので、これからも実験的で新しいことを追求しながら展覧会を作ってゆきたいと、改めて考えた。



「endless 山田正亮の絵画」展 会場風景 撮影：木奥恵三 写真提供：東京国立近代美術館

北陸新幹線と美術館

石堂裕昭 (いしどう ひろあき・福井市美術館)



2015年3月14日に金沢駅まで開業した北陸新幹線は、この冬で丸2年を迎えた。当時の北陸3県（富山・石川・福井）にとっては念願の新幹線開業であり、観光客の増加や企業誘致などの経済効果が期待される大きな出来事であった。事実、開業前からJRが各自治体や観光業界と行ってきた大型キャンペーンの成果も相まって、開業後は金沢を中心に多くの観光客が北陸3県を訪れた。

また、ストロー現象を危惧していた長野県だったが、関東からだけでなく北陸からの人の流れがきたことによる観光客の増加もあり、北陸新幹線開業の効果はあったと言えよう。

さて、この新幹線開業に絡み各県では、近年の流行ともとれる「観光」と結びつけるような様々なアートイベントが行われる一方、美術館も観光誘客に活用しようとする傾向になってきている。

まず、この冬一番の大きな出来事は、富山県立近代美術館の閉館と移転新築である。20世紀初頭から現代までの美術やポスターなどデザイン作品を核とした収蔵品を誇る富山県立近代美術館は、昨年12月28日をもって35年の歴史に幕を閉じ、最後の企画展として「ありがとう近代美術館 PART2 MOVING! -ミュージアムが『動く』」を12月3日から28日まで開催した。そして、会期最後の10日間は、クロージングイベントとして光のアーティストである高橋匡太氏による美術館のライトアップも行われ、県民に温かく見守られながらの閉幕となった。これ

まで富山駅の南側に位置していた美術館が、北側の富岩運河環水公園西側に移転新築され、新たに「富山県美術館、略称：TAD(タッド)」として、8月26日にグランドオープンすることが決定している。

グランドオープンに先立つ3月25日に、その一部を開館した富山県美術館は、地元資材であるアルミニウムと木材を多用しており、館内からは、はるか立山連峰を正面から眺められるよう、その峰と並行にガラス壁がある。まだ作品は展示されていないがこの日は展示室も見ることができ、これまでの近代美術館では、特徴ある大きなドーム展示室があったが、新館はスクエアの大きな展示室4室の他、デザイン専用の展示室やギャラリーなどもある。廊下を含めた床材の木が心地よいクッションとなっており、広々とした明るいアトリエ空間やロビーなど、開放的な現代の美術館となっていた。そして、4月29日には、デザイナー佐藤卓氏による「オノマトペ」の遊具が設置される屋上庭園がお披露目され、多くの子どもたちが訪れていた。

次に、北陸新幹線が開通するまで長野新幹線の終着駅であった長野県では、長野県信濃美術館が昨年10月に開館50周年を迎え、こちらは今年の10月から休館して全面改築にとりかかり、4年後の2021年度当初開館を目指している。長野県は全国で最も美術館の多い県であり、新美術館について長野県知事は、県内各地へのアウトリーチ活動や県内美術館との連携などを考え、「人本位」で運営する

開かれた美術館を理念としていきたいと表明している。また、長年、東京国立近代美術館で学芸業務に携わってきた松本透氏が新館長に就任することが決定しており、松本氏も記者発表の席上で、県内美術館との緊密な連携・協力体制をとることや、県ゆかりの作家支援による県内外をつなぐ役割としての夢を抱き、「人本位」として県民のコミュニケーションの場としての美術館になることを念願している。

富山県、長野県ともに新しい時代の美術館へと動き始め、高速交通網の発達による人口移動のスピード化、それに伴うグローバルな考え方を持つ一方で、県立美術館の役割・地固めとしての県内美術館との連携・協力、そして将来を担う子どもたちに対する美術へのアプローチなど、課題を持ちつつ県民に愛される美術館になっていくであろう。

まだ北陸新幹線が開通していない福井県としては、金沢開業2年を経て落ち着きつつある観光客の入込数をさらに上げるべく、2022年度末を目標とする敦賀駅までの県内延伸を見越して、様々な振

興対策を講じているところである。その一つに、アミューズメント機能を有するような第二県立恐竜博物館構想の話が県議会でも取り上げられている。(県立美術館の移転新築の話は未だ聞かれない)

そのような中、今年は福井県立美術館が開館40周年、福井市美術館が開館20周年を迎える。ともに教育委員会から事務委任された、観光営業部や観光文化局に属しており、観光誘客を図らなければならないのだが、既存の収蔵品を核とし、地元の文化・環境に根ざした美術館であることを忘れてはならない。観光に振り回される美術館ではなく、いかに観光と文化、教育を融合させられるのかが課題であり、他県の先行事例を参考にさせていただきたいと思っている。

最後に北陸新幹線開業で一番の盛り上がりを見せた石川県や、県内南端を通過する新潟県について、今回特記できなかったことを深くお詫びしておきたい。



福井駅前広場



富山県美術館外観 © 富山県美術館

アートが社会の中で語りはじめる時

廣江泰孝(ひろえ やすたか・岐阜県美術館)



人類史上、最もアグレッシブな変革期を迎えている今日、アートは今、何処へ向かおうとしているのか。その様相に呼応できず、ここ暫く停滞気味だった日本の美術館活動に、少しずつではあるが変化の兆しを感じている。愛知県で各地域を会場に開催された「あいちトリエンナーレ 2016」(愛知芸術文化センター、名古屋市美術館ほか、8月11日～10月23日)は、2016年度東海ブロック最大の現代アートの祭典であり、様々な話題を振り撒きながら最終日を迎えた。作品の数を見ていくことを前提とした芸術祭であり、小さくなった世界を共通項としながら、地域との繋がりやアートの拡がりを意識させる取り組みが随所にみられた。3回目となる今回は、港千尋芸術監督による「虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」をテーマに国内外のアーティストが集う機会となり、自分以外の他者との関係性の中で事を済ませてゆく現代人の、来し方行く末を行き交うように鑑賞することができる稀有な機会でもあった。今という時間は、成熟しているようでいて、いつまでも成熟しきれない空間であるのかもしれない。作品に観る時間と空間の捉え方や、その変容のさせ方に、今日を疾駆するアーティストの個性が強く反映した作品が目立っていた。

それぞれの目的をもって行う美術館の事業に、善し悪しなどつけられるものではないが、様々な社会的マイノリティに目を向けた、アートを通して関わろうとするこれまでとは違う価値観の受け

入れや、アウトリーチ & インリーチ活動を通じた外部組織との連携を重視する活動に、現在着目している。そうした動向にともない、これまで行ってきた「展覧会」や「展示する」とは今後どうあるべきか、その美術館活動の根本理念へとメスを入れる時期にさしかかっているのかもしれない。先行して練馬区立美術館で開かれていた「しりあがり寿の現代美術 回・転・展」(刈谷市美術館、2016年9月17日～11月6日)は、こうした様々な事案に目を向けていく上で、1人のアーティストによる認識の上での、差出がましいまでの講釈に裏打ちされた持論が展開されていて、気がつけば作家の世界にどっぷりはまる展覧会であった。アートはこれくらいのしなやかさを持っていてよい。美術館がもし社会に向けて間口を広げていくとすれば、どのくらい開口できるのか、それが問われている。

ここ暫くの展覧会傾向としては、各々の作家に作品を提示させた、状況報告による物証型の展覧会や、多種多様性を全面に展開する事例を並べた事実確認を重ねていく実証型の展覧会が続いていた。ともすれば全体の中の小さなコミュニティーを形成しているにすぎず、いかにも現代社会における芸術の窮屈さを露呈しているようで、鑑賞者不在の展覧会にいずれなりはしまいかと恐れていたが、そんな危惧など払拭する展覧会が豊田市美術館で開かれた。「蜘蛛の糸 クモがつむぐ美の系譜—江戸から現代へ—」(豊田市美術館、2016

年10月15日～12月25日)は、蜘蛛とその糸を辿りながら、古い道具類から現代美術までを一覧する構成で、何よりもアートの面白さ、その見方を現代の目線で紹介する展覧会であった。そして作品の中に登場する射影変換させながら描かれた巣の美しさがなんであるのかは、アートの領域外であっても、アートでしか語れない文脈として会場全体の展示に織り込まれており圧巻であった。その展示の仕方においても、作品本位の見せ方よりも蜘蛛の糸が編み出す作品と作品を繋げてゆく面白さを優先させた荒技が随所にみられた。

同様に、東海ブロック圏内を巡回した「再発見! ニッポンの立体」(静岡県立美術館、2016年11月15日～1月9日/三重県立美術館、1月24日～4月9日)は、日本の近代彫刻に否応なく影響を与えたオーギュスト・ロダン没後100年となる年に開催された注目の展覧会であった。近代以降の日本における彫刻と工芸という分け隔てや、古来の仏像や神像、人形、置物といった立体造形との兼ね合いに真正面から切り込んだ意欲的な内容だった。物証と実証を基軸とした野太い系譜

の後先にフィギュアやゆるキャラが登場してくる素地を緩やかに読み解き、土偶にまで遡る文脈を再構成する試みがなされていた。まさに鑑賞者の目線で構成された今を語る展覧会だった。

最後に、岐阜県美術館でのナンヤローネプロジェクトの経過報告をする。アーティストである日比野克彦館長命名による「ナンヤローネ」は、岐阜の方言「なんやろうね」を語源とするプロジェクト名である。このプロジェクトは展覧会、ワークショップ、鑑賞等様々な活動におよんでいる。2016年12月18日には、ついに参加者によって手作りされた「ナンヤローネショップ」がオープンした。ここ3、40年で美術館相当施設は日本中に限無く行き渡った。展覧会も、ワークショップもギャラリートークも、もはや日常的なものとなり、鑑賞者にとっても、作家にとっても、美術館は非日常的なものの創出、その発表の場から、その役目を広げつつある。そんな変わりゆく美術の現場で、各施設の役割を見直しては再構築していく、実り多い実験的な取り組みが、岐阜県美術館ではじまっている。



2016年12月18日 ナンヤローネショップ OPEN (岐阜県美術館)

調査と集積と

新谷式子 (しんたに しきこ・あべのハルカス美術館)



近畿ブロックの下半期を、調査と集積とをキーワードに振り返りたい。昨夏「山の日」が施行されたことに背中を押され、自称山ガールとしてまた一層、周辺の山歩きに励んでいた。ここでの報告も展覧会の周縁部を歩き回る点、どうかご容赦いただきたい。

土地の植生を知ることは楽しい。花を指差し、虫に慄き、巨木に出会えば口を開けて見上げる。その瞬間においては、「山の恩恵に感謝」より畏敬の念が大きい。大阪市立美術館における「木×仏像—飛鳥仏から円空へ 日本の木彫仏 1000年」(4月8日～6月4日)では、今更ながら木と仏像という組み合わせの、バックグラウンドの面白さに気づかされた。会期が重なった、奈良国立博物館における「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」(4月8日～6月4日)は、一人の仏師とその一門の仕事に密接な資料とともにグイグイ迫る回顧展であり、寄木造による見事なボリュームを堪能できた。こちらではマッチなお像にかぶりつきで見入ったが、「木×仏像」展では、林立する一木造りの華奢なお姿に近づき難いものを感じた。文化史的な視点を交えた解説には、お像の匂いや重さなどといった、担当学芸員が調査時に実感されたという所感が挟まれており、所蔵作品への普段の気づきと敬意が垣間見え印象的であった。

なお、「熱かった」所蔵品展として、伊丹市立美術館における「COLLECTION 1 ウィリアム・ホガース “描かれた道徳”の分析」(2016年9月17日～11月3日)を挙げたい。所蔵品を分析、再考す

る内容で、図録でも述べられているように、展覧によって研究と普及が進むことを願う熱い意気込みに満ちていた。機能的で眩しいほど魅力的な図録は、諦めきれず後日再訪し購入した次第である。作品群を再考した企画として、神戸市立博物館における「神戸開港 150年 プレイベント 松方コレクション展—松方幸次郎 夢の軌跡—」(2016年9月17日～11月27日)があった。また、人物像や活動を再考した企画として、和歌山県立近代美術館における「動き出す! 絵画 ペール北山の夢—モネ、ゴッホ、ピカソらと大正の若き洋画家たち」(2016年11月19日～1月15日)があった。いずれも、これまでとは視点を交え断片を捉え直す内容に、目が回る思いがするとともに、多くの示唆を得た。

さて、中世、仏像の用材には霹靂木が求められたという。雷に打たれることは、天から靈感を授かることと見なされたい。国立国際美術館における「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」(2016年10月22日～1月15日)では、美術家集団「プレイ」の雷を待つ塔が館内に復元された。本展は、彼らの活動の全貌を美術館で紹介する初めての企画であり、また、形がない過去の作品を展示する企画、という点でも興味深かった。作品という行為についての説明書きと、彼らが残した、あるいは「作品する」過程で残った直接の資料とを、時系列ではなく分類別に並べ、仮設壁でオープンスペースに構成するという方法は、有効な試みではなかっただろうか。美術館は何をどのように保

存してゆべきなのか。普段からの問題ではあるけれど、震災後、その取捨選択は一層難しくなったように思う。

資料つながりで二つ。丹念に紐解かれた資料が存在感を放つ企画もあった。京都国立博物館における「開館 120周年記念特別展覧会 海北友松」(4月11日～5月21日)では、丁寧な解説を添えた多数の資料が出品され、代表作、初公開作に目を奪われつつも、資料を熱心に読み込む来場者がケースの前に列を成していた。一転、京都市美術館における「生誕 300年 若冲の京都 KYOTO の若冲」(2016年10月4日～12月4日)は、資料の出品を控え作品を厚くし、物と土地にフォーカスする内容であった。壁面ケース一面すべて鶏尽くし、後ろを向いても同画題、次の展示室は鯉、鯉、鯉。ひたすら作品同士を見比べる展示は、続くブームで若冲を知った気になっていた目にとっても新鮮に映った。

国立国際美術館における「クラナハ展 500年後の誘惑」(1月28日～4月16日)は取り合わせ

の妙があり、切り口を古今東西、押したり引いたりしながら影響関係を示す展示であった。最後に話が協道にそれるのだが、ここで見たフォトスポットが、半期で最もインパクトがあった。《ホロフェルネスの首を持つユディト》の「顔出しパネル」なのだが、顔を出す穴が二つあり、画中どちらの人物にもなることができる。秀逸なのは、その穴に本来の顔が印刷された小さなドアが取り付けられていた点で、(森村泰昌の作品を見た後)どちらにもなりたくない場合には、閉めることができる。当館を引き合いに出すのだけれど、「拜啓 ルノワール先生—梅原龍三郎が出会った西洋美術」(1月24日～3月26日)では、「巨匠を訪ねる」を視覚化すべく舞台装置のようなフォトスポットを設置した。しかし、「動き出す! 絵画」展のように画家の仕事について言葉を添える形の方が素直であった。昨今、SNSは展覧会に欠かせないメディアであり、「インスタ映え」するフォトスポットは必要な道具となりつつあるが、節度は必要と肝に銘じている。



国立国際美術館「THE PLAY」展 チラシ



あべのハルカス美術館「拜啓 ルノワール先生」展 フォトスポット

鳥取県立美術館建設場所決定と 地元へ愛された作家たち

今香(こんかおる・米子市美術館)



中国地方の美術館界隈で今季最も話題となったのは、鳥取県立美術館の建設場所がいよいよ決定したニュースだろうか。20年以上前にも、鳥取県立博物館の美術部門が独立する形での新しい美術館の建設が計画されたが、県民の支持や内容検討が不十分として、1999年に計画は凍結された。しかし、新たに立ち上げられた鳥取県立美術館整備基本構想について、県教育委員会での検討の結果、今年3月3日に同美術館の建設場所を倉吉市営ラグビー場とする同構想が決定された。県庁所在地の鳥取市が有力との大方の予想を覆す結果に県内に驚きの声があがった。一部美術館機能を鳥取市に残すなど様々な動きもあり、今後もその動向にも注目したい。

次に昨年10月から現在までに中国地方で開催された展覧会としては地方、地元とのゆかりをテーマとした展示が目立ったように思われた。米子では若手作家支援展「坂本和也—Landscape gardening—」(米子市美術館、2月26日～3月12日)の開催と鳥取県立博物館の「シリーズ ミュージアムとの創造的対話 01 Monument / Document 誰が記憶を所有するのか?」(2月25日～3月20日)の西野達の米子サテライト会場の会期が重なり、県外からの美術関係者がいつになく米子を訪れた。後者の内覧会当日は、スーツケースを引きながら会場を探る関係者と思しき方々を何人も見かけた。「よく、そんな場所を見つけられたなあ。」と感心する裏路地の行き止まりのような場所に大作が4点展示

された。地元在住者でもすぐにはたどり着かない設置場所に苦勞された方も多かったようだが、宝探しゲームの様相を呈したその状況は、逆に作品発見の時の喜びが倍増した一要素になったのではないか。華やかな出で立ちの方々が街中を闊歩する様は、一瞬米子の街が海外の巨大アートフェア会場に変貌したような錯覚を覚えた。

当館の坂本和也展も地元お披露目展ということもあって、会期は13日間と少なかったが、2,390名の来場者を迎えた。帰りは西野作品の会場マップを手に、徒歩10分程度の会場へ向かう方も多かった。ということで、「飲食店も軒を連ねると繁盛する。」の例に漏れず、「この時期米子に行くと現代美術の展示が無料で色々鑑賞できる!」ということで、お互い相乗効果があったのではないか。当館に常設展示されている中ハシクシゲ《マツタカ》も関連展示ということで改めて注目を浴びた。

また、鳥取県立博物館会場での展示では、先日群馬県立近代美術館での展覧会での展示が見送られた白川昌生の《群馬県朝鮮人強制連行追悼碑》や、西野達の大変珍しい美術館内での作品展示があった。西野は鳥取県ゆかりの洋画家、前田寛治の鳥取県立博物館収蔵の作品4点を「素材」として使用して、座面の部分に前田の《裸婦》を用いた《前田寛治の椅子 2017》、辻晉堂のブロンズ像の首から下を発泡スチロールで新たに制作した作品など、収蔵作品に対して新たなアプローチを試みた。中ハシの作品は、粘土を用いての制作がス

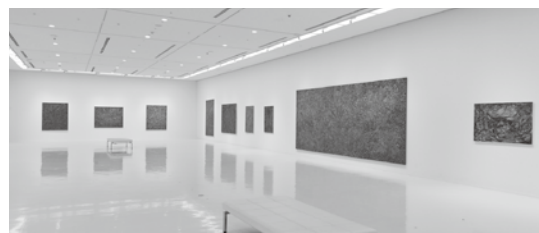
タジオ風の展示室エリアで行われ、それらの作品は市内のサテライト会場にも展示されるなど、何かと心が「ザワザワ」する展示の数々であった。関連して開催されたトークセッション「西野達はいかにしてキュレーターを白髪にするか?」のタイトルに、担当学芸員の準備からの苦勞が偲ばれた。

鳥取県安来市の加納美術館では河井寛次郎没後50周年記念事業「今こそ永遠 河井寛次郎—ふるさと安来への言伝」が10月29日から11月4日まで開催され、加納美術館収蔵の書作品も展示された。直接ご縁のあった方も多かったという安来の地にある美術館らしく、100点弱の展示作品ほとんどが個人蔵の作品によるもので、実際現在も生活の中で大切に使われている楕円(カレー)皿や香炉などが、所有者のエピソードを交えて展示され、故郷の安来でいかに今も「寛次郎さん」と呼ばれ、愛されているかが伝わる展示であった。同時期には足立美術館や鳥取県立美術館でも寛次郎の収蔵作品が展示され、それぞれ特色あるコレクショ

ンを堪能させていただくことができ、周辺一帯で寛次郎の一大展覧会となった。

鳥取県立美術館ではご遺族が80年間保管していたコレクションから作品729点と資料361点が鳥取県立美術館へ寄贈されたお披露目展として「愛しきものへ 塩谷定好 1899-1988」展が3月6日から5月8日まで開催された。『アサヒカメラ』創刊月号例懸賞全国第一位となった鳥根半島沖泊を写した塩谷の名作《漁村》が初公開となるなど、膨大な作品や資料の調査の集大成となる初の大規模展ということもあって、初日から大勢の来場者が押しかけた。

昨今「学芸員は癌」発言などの悲しい形で注目を浴びてしまっているが、紙面では紹介しきれなかった展覧会を含め、各美術館とも、作家や作品のために心血を注いで努力を続けており、その成果としての展覧会も大変充実したものであった。私もその一員として、これからも作品を守るための防波堤となるべく「目の上のたんこぶ」的な役割を担っていこうと改めて思った。



若手作家支援展「坂本和也—Landscape gardening—」展 会場風景



鳥取県立美術館「愛しきものへ 塩谷定好 1899-1988」展 会場風景



米子市内サテライト展示の西野達作品のうち、生木の太木の枝に直に仏像を彫った《たつ仏》

コレクションと人

安達一樹(あだち かずき・徳島県立近代美術館)



四国には「四国美術館会議」というものがある。その会議が3月に香川県立ミュージアムで開かれた。四国4県の美術館による発表があり、「高松市美術館リニューアルと北原千鹿展」(香川)、「愛媛県美術館所蔵の杉浦非水コレクションについて」、「高知ゆかりの写真家・石元泰博と大原治雄の紹介」、「徳島県立近代美術館の展示について」と、徳島以外は、主に地域ゆかりの作家に関するコレクションとその展示についてだった。

地域ゆかりのコレクションというのは、そこにどのような「人」がいたかで明暗が分かれるように思う。愛媛・松山出身の図案家・杉浦非水と高知ゆかり(両親が高知県出身)の写真家・石元泰博はメジャーだし、香川・高松出身の工芸家・北原千鹿についても、工芸分野に関心のある人であれば、知らない人はいないだろう。発表後の高松市美術館での「モダニズムの金工家 北原千鹿展」(2月21日～3月26日)見学会は、その作品をまとめて見ることができる貴重な機会だった。

杉浦非水については、まずゆかり作家としての企画展を開催。これを機に作品・資料等を遺族からの寄託を経て購入・受贈。また別ルートからの取蔵もあわせて7,000件におよぶコレクションを形成した。2011年に東京国立近代美術館、愛媛県美術館と宇都宮美術館で「杉浦非水研究会」を立ち上げ、5年にわたる分類整理という地道な作業により全容をおおむね把握。その区切りで再び展覧会開催という学芸活動の本道の話。

後日、同館で「生誕140年 杉浦非水 開花するモダンデザイン」展(2月22日～3月30日)を見た。展示できたのはコレクションの一部ということだが、それでも結構なボリューム。導入部に1ヵ所だけ違いのあるポスターを並べて飾るなど、興味をそそる仕掛けもあった。しかもそのポスター、一つは非水の旧蔵品、他方は近年愛媛県内で発見され寄贈されたものと、その入手先が違うということで、資料が資料を呼んだようにも思えた。

高知の石元泰博も、回顧展を機に作家本人及び遺族から万単位の膨大な量の作品等を受贈、著作権も譲渡されたというもの。高知県はアーカイヴとして専従学芸員のいる「高知県立美術館 石元泰博フォトセンター」を開設。また展示室と保管庫、作業エリアの整備も行った。

新組織に施設整備というのは並大抵のことでは無い。しかし手間を掛けただけのことはあり、展示室は小ぶりながら石元作品の縦横ピシッとした雰囲気心地よい緊張感を以て見せる。高知県立美術館に行ったら必ず石元展示室を訪れることにしているが、いつも清々しい気分になる。担当者の努力に頭が下がる。

高松からほど近い丸亀市にある丸亀市猪熊弦一郎現代美術館は、ゆかりの画家・猪熊弦一郎から所有するすべての作品などの寄贈を受け、その業績を顕彰するとともに、特別展で現代美術を積極的に紹介している。先般開催の「猪熊弦一郎展『私の履歴書』」前編(2016年4月6日～6月30日)、後

編(2016年11月19日～2月12日)は、見ていて高揚感があった。日本経済新聞の「私の履歴書」というコラムに連載された猪熊の自伝に沿った画業の紹介展だったが、連載のエピソードにまつわる作品や資料が豊富なコレクションから出品された。猪熊がニューヨークで撮ったカラーズライドの上映展示などもあり、猪熊弦一郎の美術館だからこそできる充実した内容だった。

終わりに、少々変わったコレクションがらみの展示を紹介して筆を擱きたい。まずは香川県立ミュージアムの「れきみん×東京藝大セレクション展『瀬戸内のくらし|ハレとケ』」(2016年10月8日～12月24日)。香川県立ミュージアム分館の瀬戸内海歴史民俗資料館が収集してきた国重要有形民俗文化財「瀬戸内地方の漁撈用具」ほかの民俗資料から東京藝術大学の教員が出品資料を選び、インスタレーション展示したもの。民俗資料コレクションの美術的展示という展開は、総合博物館の利を生かしたものとさえいえる。

最後は、瀬戸内海歴史民俗資料館の「60年代 JETRO 収集海外優秀商品—香川県保管の驚きの見本群」展(2016年7月16日～9月19日)と高松市歴史資料館の「心を豊かにするデザイン～讃岐民具連とその時代」展(2016年7月16日～9月4日)。香川県産業技術センターに保管されていた、昭和30～40年代に日本の産業意匠の改善のために日本貿易振興会(JETRO)が欧米諸国から収集した陶磁器やテキスタイル、家具などの一部約2,000点を紹介。そこにはマリメッコ社のテーブルクロスやリサ・ラーソンのデザインによるグスタフスベリ社製の虎の置物(陶磁器)など、現在、日本で巡回展が開かれて展示されるような作品が含まれていた。知らないところにお宝コレクションという話である。これは当時の金子正則香川県知事が文化芸術の振興に努めたことに由来するという。現在、香川県が「瀬戸内国際芸術祭」などで賑わいを見せるのも、作家以外にも「人」がいたからということなのだろう。



愛媛県美術館「生誕140年 杉浦非水 開花するモダンデザイン」展 会場風景 写真提供：愛媛県美術館
右手の壁に1ヵ所だけ違いのあるポスターが並ぶ。

連なりのうちに見えた熱さと苦さ

西本匡伸 (にしもと まさのぶ・福岡県立美術館)

この頃、新聞を読むのが楽しみになっている。西日本新聞の朝刊に、「美術館うらおもて」と題して、福岡アジア美術館の安永幸一元館長の聞き書きが3月17日から連載されているからだ。安永元館長は福岡市美術館の開館（1979年）にも中心となって携わり、紙面ではその開設にまつわる秘話に始まり、4月中旬の時点で、同館での「アジア現代美術展」（1980年）の苦労話に移っている。かつて漏れ聞いたあれこれの話題の詳細が明かされたりして興味深い。いわゆる地方美術館建設ブーム初期の頃で、美術館に期待する熱気が作家のみならず住民や行政にまで広がっていた。でも誰も美術館とはなにかをはっきりとは知らなかった。だから美術館は人々の大きな夢たりえたのかもしれない。

聞き書きといえば、洋画家・野見山暁治氏と福岡の画材店山本文房堂の会長・的野恭一氏との対談を聞き書きした『絵描きと画材屋』（忘羊社、2016年10月）も面白い。野見山本人を含めた美術家たちの素顔とともに、彼らが闊歩した戦前戦後の福岡の街や文化の移ろいが、半世紀もの交友のあった二人の強靱な記憶力を通して活写されている。

街の文化といえば、当館で開催した「九大百年美術をめぐる物語」（2016年10月8日～11月13日）は、明治末に開学した九州帝国大学が、以降に福岡博多の地で果たした美術の集積や交流を取り上げた展覧会である。かつての博士たちは、専門分野を超えて文化にも強い情熱を発して都市文化形成の一翼を担っていたことが判る。田川市美術

館の「沸点」（2016年11月18日～12月25日）も、筑豊の文化の地下鉱脈に流れる反骨のエネルギーを再確認する展覧会であった。つなぎ美術館の「幸田千依展」（2016年9月17日～11月27日）では、幸田氏が4ヵ月間津奈木町に滞在し、住民との交流の中で実感した地域の輝きを新作で表現した。

前述の福岡市美術館といえば、2016年9月から大規模改修工事のために休館に入った。北九州市立美術館も2015年9月から改修休館中である。休眠する収蔵品の活用という訳で、両美術館の収蔵作品から絵画を選別して、「夢の美術館めぐりあう名画たち」として九州各地の美術館及び松江で2016年12月から巡回展が開かれている。ドガやダリといった巨匠から東山魁夷や佐伯祐三、そして具体や九州派の作家とバラエティに富んだラインナップだが、通り一遍の名画紹介に終わらず、章立てが工夫され図録テキストも充実した内容になっている。

巡回展といえば、元石橋美術館の久留米市美術館で「吉田博展」（2月4日～3月20日）が開かれた。久留米出身の吉田は少年時代に久留米を離れたため、地元では郷土作家という意識が薄かったと聞く。今回の本格的な回顧展には多くの来館者があったとのことで、市民権を得たことだろう。また都城市立美術館に巡回した和田英作の回顧展（2016年10月22日～11月27日）や北九州市立美術館分館での「見立ての手法 岡崎和郎 Who's Who」（2016年11月19日～1月15日）も本格的な重

厚な内容で、いずれも開催館学芸員が構成や執筆に関わり、巡回各館のパワーが凝固されて熱意が伝わってくる。

回顧展といえば、長崎県美術館の「梶島勝一の世界」（1月15日～4月9日）は、『少年倶楽部』などの雑誌の挿絵において超絶的なペン画で子どもたちを魅了した梶島を全貌を紹介している。戦前期の戦意高揚の様々な物語に添えられた梶島のリアルな挿絵を見ていると、いわゆる戦争記録画の後景には、それに類似したイメージが当時多量に流通していたことに気付かされる。梶島の緻密な戦闘シーンに少年たちは熱中して頁を繰ったことだろう。当館で開催した「写真家片山攝三 肖像写真の軌跡」（2月4日～3月20日）は、著名な画家や文筆家の肖像写真を撮り続けた片山のスタンスを、写真館における彼の営業写真の地平から見直した展覧会であった。沖縄県立博物館・美術館の「山元恵一展」（3月3日～4月23日）は、戦後間もない占領下の沖縄の美術界で先導的な役割を果たした洋画家・山元の本格的な回顧展である。沖縄の近代美術は工芸や写真を除くと、日本の美術史の文脈のなかで語られることが少ないが、洋画においていち早く注目されたのが、山元の代表作《貴

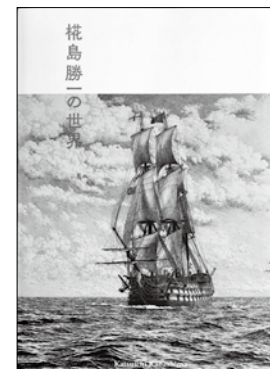
方を愛する時と憎む時》（1951年）である。このシュルレアリスムの美しい作品は、日米に対する沖縄／OKINAWAの複雑でアンビバレントな想いを静かに訴える。今回の回顧展では東京美術学校時代の池袋モンパルナスの作家たちとの交流も含めて、広い視野から画業を検証している。

沖縄といえば、全国美術館会議の「各ブロックを構成する都道府県」に沖縄県だけがない。沖縄県に全国美術館会議正会員がないにしても、時評対象のブロック構成から疎外されていることに苦い思いを抱かざるを得ない。

最後に苦い思いといえば、1年前の熊本地震だ。熊本県内の多くの美術館が被災し、文化財も甚大な被害に見舞われた。各館の被災状況や再開への取組、文化財レスキュー活動などについて2016年夏以降、九州では研修会や研究会で報告されてきた。節目として熊本県立美術館で「震災と復興のメモリー@熊本」（4月14日～5月21日）が、熊本市現代美術館で「アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本展」（3月1日～4月30日）が開催されている。地震の苦さとともに両館の復興への熱い想いが伝わってくる。



井口幸久（聞き手）『絵描きと画材屋』
忘羊社 書影



長崎県美術館「梶島勝一の世界」展
カタログ表紙

NO. 1

苫小牧市美術博物館

〒053-0011 北海道苫小牧市末広町 3-9-7



TEL: 0144-35-2550
FAX: 0144-34-0408
E-mail: hakubutukan@city.tomakomai.hokkaido.jp

【開館時間】
午前9時30分から午後5時まで
(入館は午後4時半まで)

【休館日】
月曜日(祝日の場合は翌平日)、12月29日～1月3日

【開館時期】
2013年7月27日

苫小牧市美術博物館は、既存の博物館に美術館機能を持たせた複合施設として増築・改修するかたちで2013年7月27日にリニューアルオープンを果たした。当館は市民文化公園(現・立光カルチャーパーク)内に立地するため、市立中央図書館やサンガーデン(室内植物園相当施設)などの文化施設が隣接しており、市民の憩いの場にもなっている。前身となる苫小牧市博物館は、1985年11月3日に苫小牧市の基本構想に掲げる『学ぶ喜びがあふれ文化の薫るまち』の実現をめざして、郷土の自然や考古、歴史、民俗資料及び文化芸術に関する資料を収集保管し、調査研究を行う総合博物館として開館。その後、市民の美術館開館の要望により、美術館機能を増設するかたちでリニューアルに至った経緯がある。

リニューアル前から地元企業のご協力をいただいた特別展を開催するなど、“企業城下町”としての地の利を活かした展覧会活動を継続的に実施してきたが、「美術博物館」としてのリニューアル以降は、そうした地元企業との連携のみならず、他都市館園との連携も強化し、複合施設としての特性を活かした展覧会活動を展開してきている。

郷土画家をはじめ苫小牧市にもゆかりの深い川

上澄生らに関する調査・研究に基づいた展覧会活動はもちろんのこと、苫小牧の地下資源に焦点を当て、科学と美術の両面からエネルギー資源について考察する展覧会や、新千歳空港に隣接する当館の場所性に基づき、「空」と「飛行機」をモチーフとする美術作品や資料をとおして“空を飛ぶこと”の意味を問直す展覧会など、複合的な展示事業により個性を打ち出すことで他館との差異化を図ってきた。

あわせて、各種講演やワークショップ等、多彩な教育普及活動の実践も当館の特色である。なかでも、博物館時代より継続的に実施してきた講座シリーズ「美術博物館大学講座」は、リニューアル以降、美術関係の講座も織り交ぜ実施しており、毎回100人の定員を上まわる参加者を得るなど、市民から根強い支持を集める事業となっている。

今後も、こうした複合施設としての特色を活かした展覧会及び教育普及活動をはじめ、中庭スペースを活用した展示事業の実践や、地域で活動する若手アーティストと連携したプログラムなどをとおして、より幅広い層が興味・関心を持ち得るような事業展開とその発信に努め文化の振興に励んでいきたい。(細矢久人・ほそやひさと)

no.2

東根市公益文化施設 まなびあテラス

〒999-3730 山形県東根市中央南 1-7-3



TEL: 0237-53-0223
FAX: 0237-42-1295
E-mail: info@manabiaterace.jp

【開館時間】
美術館は午前9時から午後6時まで(入館は閉館の30分前まで) / 図書館は午後8時(日・祝は午後7時)、市民活動支援センターは午後9時30分まで

【休館日】
第2・第4月曜日、年末年始、展示替期間

【開館時期】
2016年11月3日

旧東根市さくらば図書館(2016年9月閉館)の移転拡大と市民の作品発表の場をつくるため、「市民が主役」をコンセプトに市立図書館・美術館・市民活動支援センターからなる複合文化施設として昨年11月にオープンした。市役所の南に位置し、隣には県立中高一貫校も新たに開校。併設するカフェや都市公園とあわせ、街の新たなランドマークとして市民に定着しつつある。設計は山下設計仙台支社、ロゴマークはアカオデザインによるもの。東根のシンボル、樹齢1,500年の大けやきにちなみ「文化の大樹」をイメージしたロゴとなっている。

東根市初となる美術館は特別展示室、市民ギャラリー、アトリエから構成される。地域住民が芸術に触れ、自ら制作・発表する創作活動の循環支援を主目的とする。東北芸術工科大学、筑波大学と連携し、近現代美術・文学・デザイン等の分野で地域ゆかりの作家や国内外の美術を紹介する企画展を年間4～6本行う。

特別展示室では、まなびあテラスが主催または企画した展覧会を開催。国内外の作品による展覧会や巡回展、市の所蔵作品による展示を行う。当館は市内の別施設に保管されている市所蔵品約480点の調査・利活用を委託されており、これを定期的に展示公開することで常設展示的な役割を果たすことと

している。油彩・水彩・版画、書などのうち、主に風景画家・柏倉清助(1926年東根生れ)の油彩86点、菅原汎人(1922年東根生れ～2013年神戸没)のヨーロッパの風景を描いた油彩64点、水彩素描160点があげられる。市民ギャラリーでは市民を中心に一般に貸し出すほか、主催展示も開催する。400㎡の空間は、遮音性のある可動間仕切り壁により、最大4つの空間に区切って、同時に4組が使用できる。アトリエではろくろや電気釜などを備え、16席のスペースで自由に制作ができる。個人での制作のほか、ワークショップや講座の開催も可能である。

最大面積を有する図書館は20万冊の収蔵能力をもち、通常の貸本サービスに加え、小説家のトーク、絵本作家による即興制作パフォーマンス、人形劇、落語公演など、読書文化にふれるさまざまな企画を美術館と連動して行っている。教育普及部門を担う市民活動支援センターでは、展覧会と連動したワークショップ実施をはじめ、およそ40の市民団体にロッカー、アトリエ、印刷工房等を貸し出すといった拠点形成支援、制作・発表活動支援を行っている。

情報と芸術文化の交流拠点として、それぞれの機能が互いに融合し相乗効果を発揮することにより、新たな発見や感動の場を提供していきたい。

(松葉里江子・まつばりえこ)

蕪崎大村美術館

〒407-0043 山梨県蕪崎市神山町鍋山 1830-1



TEL: 0551-23-7775

FAX: 同上

E-mail: n-omura@eps1.comlink.ne.jp

〔開館時間〕

午前 10 時から午後 6 時まで (4 月～10 月)

午前 10 時から午後 5 時まで (11 月～3 月)

(入館は閉館の 30 分前まで)

〔休館日〕

水曜日、年末年始、展示替期間

〔開館時期〕

2007 年 10 月 27 日

蕪崎大村美術館は、山梨県蕪崎市出身で天然物有機化学者である大村智博士が長年に渡り収集してきた美術品を広く多くの方と共有したいとの想いのもと、2007 年に設立された。一年間、私設美術館として運営したのち、蕪崎市に寄贈され、現在は市立美術館として管理運営を行っている。

収蔵品は博士が収集してきた美術品を基に、女性美術家による作品、日本近代の洋画家・鈴木信太郎作品、日本の民藝運動を伝える陶磁器作品を軸に構成され、現在総点数 2,000 点を超える収蔵数となっている。作品が収蔵されている女性美術家たちは女子美術大学出身者が多いが、それは、同大学が女子の美術学校として最初に開校し、長い歴史を有していること、そして博士が 1997 年から 2015 年までの間に 14 年余り同大学の理事長を務めたことによる。

建物の一階には、企画展示室と常設展示室を備え、常設展示室では女性美術家の作品を展示している。二階は、鈴木信太郎の作品を常設で展示する鈴木信太郎記念室と、陶磁器作品を紹介する展望室がある。当館は高台に位置しており、晴れた日の展望室からは、富士山、八ヶ岳、茅ヶ岳、奥秩父連峰など蕪崎市を囲う山々を一望することができる。作品の鑑賞に加えて、四季折々に見られる豊かな自然の風景も楽しんでいただくことができ

る。

企画展は、主に収蔵品の中からテーマを設定し、年 4 回程実施している。コレクションの主要な柱の一つである女性美術家の作品については、さまざまな切り口でテーマを設定し、その世界の広がりを紹介するように努めている。展覧会の内容によっては関連するイベントを企画し、展示作家によるトークショーやミュージアムコンサートなどを実施している。

そのような展示活動に加えて、夏休み期間中には小学生を対象とした造形教室の開催、また市内の学校や病院、市民交流センターなどへ収蔵品の貸出し事業を行っており、地域の文化・芸術振興のため様々な取組みを行っている。

2017 年は、開館 10 周年を迎える節目の年に当たる。これを記念して、収蔵品の中から精選した記念図録の発行と、館内に「大村智記念室」の開設を予定している (9 月 9 日オープン予定)。記念室には、博士が 2015 年ノーベル生理学・医学賞を受賞するに至るまでの道のりや、収集してきた美術品を紹介する予定である。研究者であり美術品コレクターでもある博士の人となりより身近に感じながら美術に親しんでもらい、多くの方々が気軽に楽しめる美術館となるよう努めていきたい。

(平尾美帆・ひらおみほ)

大田区立龍子記念館

〒143-0024 東京都大田区中央 4-2-1



TEL: 03-3772-0680

FAX: 同上

E-mail: (代表メールなし)

〔開館時間〕

午前 9 時から午後 4 時 30 分まで

(入館は午後 4 時まで)

〔休館日〕

毎週月曜日 (祝日の場合はその翌日)、
年末年始、展示替期間

〔開館時期〕

1963 年 6 月 6 日

龍子記念館は、日本画家・川端龍子 (1885-1966) が自宅の向かいに自身の発意と設計でつくりあげた美術館である。1963 年 6 月 6 日に、龍子が文化勲章を受章したことと喜寿を迎えたことを記念して開館し、龍子の没後も記念館を管理していた社団法人青龍社の解散にもない記念館及び作品が大田区に寄贈され、1991 年からは「大田区立龍子記念館」としてその事業を引き継いでいる。この地域一帯は、大正の頃から多くの作家が暮らした馬込文士村として知られており、現在は、大田区立郷土博物館をはじめ、大田区立熊谷恒子記念館、大田区立山王草堂記念館、大田区立尾崎士郎記念館といった文化施設が立ち並んでいる。歴史ある地域の文化拠点、観光拠点として、当館を含め各館が地域との連携を深めながら活動をより充実させ、特色のある施設となるよう取り組んでいる。

当館は、大正から昭和にかけて活躍した龍子の作品を約 140 点所蔵している。龍子は、昭和初期に「会場藝術」というスローガンを掲げ、床の間を飾るような繊細な日本画ではなく、美術館における展覧会の時代に即した大画面に描かれた作品を多く制作したため、当館の所蔵作品は幅 7m を超える大作を中心に構成されている。所蔵作品の他、約

2,000 点のスケッチや龍子が旧蔵していた資料等と合わせ、年 3 回の通常展と隔年での特別展によって、多角的なテーマから龍子の画業の紹介を行っている。また、当館の向かいには龍子公園があり、龍子が亡くなるまで過ごした旧宅、アトリエを保存している。開館日に解説つきの案内を 3 回おこなっており (10 時、11 時、14 時)、作品だけではなく、画家の生活にたいする美学も深く味わうことのできる施設となっている。

展示以外では、地域との連携に特に力を入れている。近隣の区立の記念館 4 館が共同して地域の魅力を伝える記念館講座の開催によって積極的な情報発信をおこない、ボランティア育成講座では地域住民と協力して地域の文化活動を盛り上げていく体制づくりに取り組んでいる。また、教育普及活動では、近隣の小学校を対象とした夏休み中の無料開館の実施やキッズ向けのギャラリートークの開催なども充実させている。

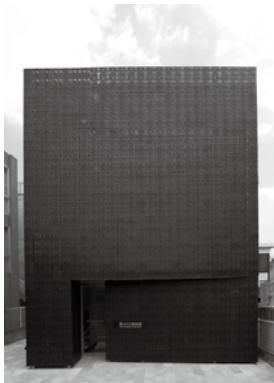
今後これらの活動をとおして、この地に暮らした川端龍子の画業を顕彰していくとともに、地域の芸術・文化活動の拠点としての機能を一層拡充していく。

(木村拓也・きむらたくや)

no.5

さと 郷さくら美術館

〒153-0051 東京都目黒区上目黒 1-7-13



TEL: 03-3496-1771
FAX: 03-3496-1772
E-mail: tokyo@satosakura.jp

【開館時間】
午前10時から午後6時まで（入館は午後5時30分まで）

【休館日】
月曜日（祝祭日の場合は直後の平日）、
年末年始、展示替期間

【開館時期】
2012年3月28日

郷さくら美術館は、現代日本画をご覧頂くための専門美術館として、2006年福島県郡山市に郡山館を、2012年東京都目黒に東京館を開館した。現在は東京館に展示を集約し、季節ごとに展覧会を開催、また常時「桜絵」を楽しんで頂ける展示室を設けており、“桜の美術館”としてお客様にご利用頂いている。

東京館の建築キーワードは「昇華」とし、伝統的な要素を用いながら、絵画が主役となる現代的なデザインを採用、印象的なファサードは、当館のロゴマークをモチーフにした1,100枚の素焼きの有孔タイルを積み上げ、モダンな外観を作り上げている。設計デザインは“ブルースタジオ”が手掛け、2012年度グッドデザイン賞を受賞した。

当館のコンセプトは「やさしさ」をモットーとしており、ご来館頂くお客様と作品を展示する作家とが、この美術館を通じて繋がる。そのために、観る人にやさしい、そして作家にとってもその作品に込めた思いを大切に、そんな美術館活動を実施している。

当館のコレクションは、昭和生まれ以降の日本画家の作品を中心に収集されている。福島県には天然記念物に指定されている三春の滝桜や桜の名所が数多く点在しており、また240年以上の歴史を持つ須賀川牡丹園もあり、福島を訪れる画家たちの写生

からは、多くの優れた作品が制作されている。当館においても、取材に訪れた日本画家との交流を通じ、三春町や須賀川での写生をもとに描かれた、素晴らしい作品を数多く収蔵している。こうして収蔵された作品数は現在700点を超え、その多くが50号を超える大画面の作品であることも当館コレクションの特徴でもある。

当館では、展覧会ごとにテーマを設定した「コレクション展」という形式で収蔵作品を一般公開している。現在では、これからの担う新たな才能の発掘・育成のために「郷さくら美術館桜花賞」（2013年春～）を設け、コンテスト開催から受賞作品の選定までを実施、さらには出品作品すべてを買上げ、展覧会にて展示、若手日本画家の応援をしている。また、より多くの人々に日本画の魅力に触れて頂く“場”となることを目的とし、今夏（2017年9月）にはニューヨークのチェルシーにギャラリーを開設する。

当館は非常に小規模な美術館ながら、現代日本画に特化した数少ない専門美術館であり、理念は世界中の人々に「現代日本画の素晴らしさ」を発信してゆくことである。作品の公開や普及活動を通じて、より一層の美術館運営の充実を図ってゆきたい。
(中村鉄平・なかもむらてっぺい)

no.6

安曇野山岳美術館

〒399-8301 長野県安曇野市穂高有明 3613-26



TEL: 0263-83-4743
FAX: 0263-83-7780
E-mail: mt.museum1@jcom.home.ne.jp

【開館時間】
午前10時から午後4時まで
（入館は午後4時まで）

【休館日】
毎週木曜日（祝祭日の場合は開館、
GW期間と8月は無休）
冬期休館 12月11日～翌3月9日

【開館時期】
1983年3月

安曇野山岳美術館は「北アルプスの麓で、北アルプスを中心とした山岳絵画のみを展示すること」を創館の理念として、1983年3月に開館した山岳絵画専門の美術館である。開館以来「思想をもった美術館」として評価して頂き、全国各地から山好きの方や絵の好きな方たちが来館されている。

美術館の周囲はアカマツ林に囲まれ、庭には山ツツジはじめイワウチワ、イワカガミ、ササユリなどの高山植物が自生し、それぞれの季節には美しい花が美術館を彩ってくれる。

建物は降旗建築設計事務所会長で古民家再生の第一人者である降幡廣信氏の設計で、山小屋を連想させる大きな梁柱が特徴となっている。展示室2室、図書コーナー、ショップコーナー、喫茶室、カフェテラスからなり、第一展示室では日本山岳絵画の先駆者として知られる足立源一郎の秀作「滝谷ドームの北壁」「北穂高岳南峰」をはじめ、加藤水城の「白馬鍾と杓子岳」、1998年の『PHP』1月号の表紙を飾った上田太郎の「西穂高岳頂上より」、原田達也が初めて登頂を果たした「朝焼けのスパンティーク峰」、その他の作家の油彩、水彩、版画、デッサン

などの作品を40点前後常設展示し、年数回の展示替えをしている。第二展示室では「山」と「自然」をテーマにした企画展を年3回ほど開催している。

また、美術館を情操教育の場と位置付け、将来を担う子どもたち、小学生には美術館を無料開放し夏休みには毎年子供向けワークショップ（油絵体験、カリンバづくり、モビールづくりなど）を開催している。さらに美術館を地域における文化の発信拠点として捉え、毎年数回の一般向けワークショップ（版画教室、きりえ教室、生け花教室など）や1年に1度各地から演奏家を招き展示室の中、絵画に囲まれた演奏会も行っている。

小さな個人美術館ではあるが、来年には開館35周年を迎える。地域柄、来館者は観光客が多い。規模、財力ともに小さな当館ではできないことも限られるかもしれないが、「小さな個人美術館」でなければできない事、「小さな個人美術館」だからこそできる事を模索しながら、少しでも多くの人に、また地元の人に親んでもらえる美術館を目指していきたい。
(岩佐峰子・いわさみねこ)

no.7

(公財) 水野美術館

〒380-0928 長野県長野市若里 6-2-20



TEL: 026-229-6333
FAX: 026-229-6311
E-mail: info@mizuno-museum.jp

【開館時間】
午前9時30分から午後5時30分まで(4月～10月)
午前9時30分から午後5時00分まで(11月～3月)
(入館は閉館30分前まで)

【休館日】
月曜日(祝日の場合は翌日)、展示替日、1月1日、
12月長期休館あり

【開館時期】
2002年7月27日

水野美術館は、キノコの総合企業「ホクト株式会社」の創業者・故 水野正幸が、長年にわたって蒐集した近現代日本画コレクションをもとに、2002年7月に開館した日本画専門の美術館である。

場所は、善光寺を有する長野市内中心部、JR長野駅東口からバスで10分程に位置する。門をくぐると700坪の日本庭園が広がり、錦鯉の回遊する池泉と白砂、木曾五木と呼ばれる信州の銘木やシダレザクラが豊かな彩りを見せ、非日常の空間へと誘う。

4つの展示室を備えた2階・3階の延床面積は約1,624㎡と広く、ゆったりとした空間づくりを意識しており、屏風や大幅の軸作品を無理なく展示できるガラスケースを計90m設置。各所とも映り込みを防ぐためにケースの向かい側はすべて壁面とし、フロアは靴音が響かないよう絨毯敷きとするなど、静かに作品と向き合える鑑賞環境を整えている。

コレクションは、明治期、岡倉天心が目指した“新しい日本画”の創造に邁進した橋本雅邦・横山大観・下村観山・菱田春草らを核とし、国民的風景画家・川合玉堂、美人画の上村松園・錦木清方・伊東深水、戦後活躍した杉山寧・高山辰雄・加山又造など、近代以降、日本画壇を率いた巨匠たちの作品約500点で構成される。なかでも長野県出

身の菱田春草の蒐集には力を入れ、現在、初期から晩年の作にいたるまで37点という全国でも屈指の所蔵数を誇る。さらに、桜の画家で知られる地元出身の中島千波をはじめとし、いずれも花の画家として人気の高い松尾敏男・平松礼二など現代作家の作品も充実。近代から現代にわたる日本画の歩みをたどることができる。

また、大観の名を世に知らしめた《無我》(1897年、東京国立博物館蔵)の発表後に、同一の構図で描き直したと伝わる《無我》(1897年)を所蔵。本作を筆頭に、年4回のコレクション展では、毎回親しみやすいテーマを設け、会期ごと全て作品を入れ替え、順次所蔵品を公開している。

展示会は、この他に年2回、特別企画展を開催。日本画の枠にとらわれず、多角的な視点から美術を紹介するよう努めている。この他、外部から講師を招いてのワークショップや制作の実演鑑賞会、講演会など多彩な活動も行う。

本年で、当館は開館から15年目を迎える。これまでの感謝とともに、今後も地域の心のオアシスとして芸術文化発展の一助となるよう、魅力ある美術館づくりを目指していきたい。

(高田紫帆・たかだしほ)

no.8

熊本県立美術館

〒860-0008 熊本県熊本市中央区二の丸2番



TEL: 096-352-2111
FAX: 096-326-1512
E-mail: bijutsukan@pref.kumamoto.lg.jp

【開館時間】
午前9時30分から午後5時15分まで
(入館は午後4時45分まで)

【休館日】
月曜日(祝日の場合は翌平日)、展示替・収蔵庫燻蒸期間等
第3次改修工事等による休館日=2017年11月13日～
2018年3月末(予定)

【開館時期】
1976年3月4日

熊本県立美術館は、1976年の春、熊本県で初めての美術館として熊本城を望む一角に開館した。古今東西の幅広い分野の美術を対象として活動しており、様々な展覧会や調査・研究、コレクションの体系化と保存・継承、教育・普及などの各種事業を多彩に展開してきた。

収集と企画については、(1)日本及び東洋の古美術、(2)日本の近・現代美術、(3)西洋美術という3本の大きな柱を立てて運営のアイデンティティとしている。近世以前では熊本ゆかりの美術品や歴史資料などを収集する一方、仏教美術や近世絵画などの美術・工芸や歴史的視点の展覧会を企画し、また装飾古墳を美の源流として位置づける「装飾古墳室」を設けている。近・現代美術では、牛島憲之、野田英夫、海老原喜之助、浜田知明など熊本ゆかりの作家たちの業績や熊本の美術動向を中心に紹介してきた。西洋美術では、ルノワールやエコール・ド・パリなどのフランス絵画、古典から現代までの欧米版画などを所蔵しており、熊本ゆかりの画家で国際的に活躍した藤田嗣治(レオナルド・フジタ)を核に、企画と収集を繋げる試みが続いている。

当館にとって重要な作品群が、熊本藩の藩主であった細川家ゆかりの品々で、世界有数の名品群として名高い細川コレクションである。開館以来、細川

家の美術品や文化財を保存・研究・公開する東京の公益財団法人「永青文庫」との連携を続けており、伝来の名宝や横山大観、菱田春草らの傑作群を紹介してきた。また肉筆浮世絵など第一級の名品を擁する今西コレクションは、故・今西菊松氏が一代で収集した驚異の作品群である。

教育普及事業では、子ども美術館や各種ワークショップなどで美術の面白さと奥深さを伝える取り組みを推進してきた。またスクールミュージアム事業では、浜田知明やシャガールの版画などを県内の学校に展示して、児童・生徒に鑑賞の機会を提供している。建築の観点からみると、熊本県立美術館の本館は、世界的な建築家・前川國男による美術館建築の名作として高く評されており、永い樹齢の木々を残して巧みに設計された建築空間が熊本城の環境に美しく溶け込んでいる。

2016年の春、当館は開館40周年を迎えた。その直後に起きた熊本地震でも建屋の被害は比較的少なく、1ヶ月半後には再開館して事業を展開した。四季折々に美しい佇まいを見せる美術館を舞台に、多彩な取り組みを通して総合美術館としてのヴィジョンの実現をめざしたい。

(村上哲・むらかみさとし)

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社	株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
有限会社アート・フリース (大阪美術)	一般社団法人全国美術商連合会
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
株式会社アトリエリーブ	大日本印刷株式会社
有限会社イー・エム・アイネットワーク	株式会社丹青研究所
イカリ消毒株式会社	株式会社 TT トレーディング
イセ文化財団	株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
株式会社印象社	株式会社東京美術
AGC グラスプロダクツ株式会社	株式会社東京美術倶楽部
株式会社 NHK エデュケーションナル	凸版印刷株式会社
株式会社 NHK プロモーション	株式会社 トップアート鎌倉
M&I アート株式会社	トライベクトル株式会社
影山幸一 (アートプランナー・デジタルアーカイブ)	日油株式会社
株式会社加島美術	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
カトーレック株式会社	日本通運株式会社
公益財団法人かながわ国際交流財団	株式会社美術出版社
湘南国際村学術研究センター	美術年鑑社 新美術新聞
株式会社ギャラリーためなが	ピープルソフトウェア株式会社
株式会社求龍堂	株式会社伏見工芸
株式会社キュレイターズ	ホーチキ株式会社
協同組合美術商交友会	有限会社丸栄堂
株式会社グッドフェローズ	ヤマトロジスティクス株式会社
株式会社クレヴィス	株式会社ユニークポジション
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科	読売新聞東京本社
高精細映像活用プロジェクト	ライトアンドリヒト株式会社
株式会社廣濟堂	株式会社レンブラント
JOPD 株式会社	早稲田システム開発株式会社
株式会社集英社	(五十音順)

事務局から

第 66 回総会について

企画担当幹事 前山裕司 (まえやま ゆうじ・埼玉県立近代美術館)

2017 年 5 月 25 日 (木)・26 日 (金) の両日、神奈川県鎌倉市で行われた平成 29 年度第 1 回理事会及び第 66 回総会についてご報告します。今回の総会の開催にあたっては、担当館の神奈川県立近代美術館のほか、茅ヶ崎市美術館、平塚市美術館、横須賀美術館にご尽力いただきました。4 館の皆様にあらためてお礼申し上げます。

25 日午前には七里ヶ浜の鎌倉プリンスホテルで開かれた理事会では、総会審議に先立って、前年度事業報告及び決算、今年度の事業計画と予算案、新入会員館の審査、新役員候補者の選任のほか、「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」、全美の法人化への検討の継続、事務局員の就業規則に関する規約改正、災害対策委員会の設置などの議案が審議・承認されました。

同日午後、同ホテルにおいて、黒岩祐治神奈川県知事の歓迎挨拶及び圓入由美文化庁文化財部美術学芸課長の祝辞の後、正会員 178 館 227 名の出席により、神奈川県立近代美術館の水沢勉館長を議長として総会が開催されました。審議事項としては平成 28 年度事業報告及び収支決算、平成 29 年度事業計画案及び予算案が承認されました。続いて、新規入会として苫小牧市美術博物館、東根市公益文化施設まなびあテラス、韮崎大村美術館、大田区立龍子記念館、郷さくら美術館、安曇野山岳美術館、公益財団法人水野美術館、熊本県立美術館の 8 館が承認され、正会員数は 388 館となりました。個人会員 5 名の

入会も承認され、賛助会員として新たに 6 社の入会も報告されました。

今年度は役員改選期にあたり、理事会から提出された役員候補者について審議されました。伊藤文吉理事 (一般財団法人北方文化博物館前館長) の逝去、谷新 (宇都宮美術館前館長)、白石和己 (山梨県立美術館前館長) 両理事の退任、欠員 1 名の後任について、十和田市現代美術館の小池一子館長、平塚市美術館の草薙奈津子館長、東京ステーションギャラリーの冨田章館長、大阪市立東洋陶磁美術館の出川哲朗館長の 4 名の推薦があり、承認されました。その後、別室で新役員による臨時理事会が開かれ、埼玉県立近代美術館の建昌哲館長が会長に再任されました。副会長には、徳川美術館の徳川義崇館長、国立国際美術館の山梨俊夫館長、長崎県美術館の米田耕司館長 (いずれも再任) が建昌会長から指名されました。また、企画委員長には富山県美術館の雪山行二館長が再任されました。

総会再開後、山梨俊夫美術館運営制度研究部会長と貝塚健幹事が登壇し、「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」について会場に諮られました。この「原則と行動指針」については昨年の総会の特別セッションでも多くの意見が交わされましたが、今回も会場からは様々な議論が起きました。最終的には、美術館運営制度研究部会を中心に長年推敲し、第 30 回学芸員研究会や正会員への投げかけなどを経て第 10 草案まで

練り上げたこと、また最近起こっている美術館と学芸員をめぐる理不尽な批判などの状況をふまえて、結論を出すべきとの意見があり、挙手による採決によって圧倒的多数で承認されました。

報告事項では、雪山企画委員長の挨拶に続き、各研究部会の幹事の方々から前年度の活動報告と今年度の活動計画の説明が行われました。続いて、東日本大震災復興対策委員会の活動について山梨委員長より報告があり、今後発生する大災害に対処するよう「災害対策委員会」を設置し、「東日本大震災復興対策委員会」を継承しつつ廃止すること、及び豊田市美術館の村田眞宏館長が委員長に就任することが報告されました。

総会に続き、田園調布大学大学院（人間学研

究科子ども人間学専攻）佐伯胖（ゆたか）教授による特別講演会「アンラーニング（Unlearning）としての美術」が開かれました。認知心理学者の佐伯教授による「まなびほぐし（アンラーン）」という考え方に基づくお話は美術館の現場に直結する内容で参加者からも好評でした。

総会 2 日目の 26 日は、多くの参加者が担当館である神奈川県立近代美術館を視察したほか、茅ヶ崎市美術館、平塚市美術館、横須賀美術館などを見学に訪れました。

次回の第 67 回総会は、富山県美術館に担当館をお願いして、2018 年 5 月中旬に富山県富山市で開催されます。ぜひ多くの会員にご参加いただくようお願いします。

編集後記

『ZENBI』の 12 号をお届けする。この半年、美術館をめぐる話題の中で失笑を買ったのは愚かな大臣による「学芸員は癌」という発言であり、今号においてもいくつかの報告の中で言及されている。しかしこのような発言が公然となされる背景には、美術館本来の使命を忘れ、あたかも収益と集客こそを施設の目的とみなす風潮があるだろう。民営化やコンセッション、美術館のレゾン・ド・エートルそのものを変えてしまうような制度が次々に導入される時代にあって、私たちは自分たちが抛って立つ原則をあらためて確認する必要があるだろう。

「事務局から」にもあるとおり、先般の総会で「美術館の原則と美術関係者の行動指針」が圧倒的多数によって承認された。長い議論と度重なる推敲の末にこの原則と指針が制定されたことの意義は大きい。表現の自由を脅かす可能性のある法律が施行され、実際に美術館という場で自己検閲や忖度に基づいた規制が幅をきかす今日、私たちの良心の抵抗のよりどころとなることを期待したい。今号には間に合わなかったが、原則と指針については次号に関連記事を掲載したいと考えている。

近年、展覧会が大がかりになるにつれ、展示において建築家やデザイナーとの協働作業が組まれる場合が多い。フォーラムではこの問題と関わる記事を掲載した。欧米の美術館のように展覧会に関わる作業が分業化されつつあるということであろうか。今のところこのような分業が可能となるのは国立館をはじめとする比較的大きな美術館であるが、学芸員と異なった視点を展覧会に持ち込むことはそれなりに意味があると感じる。美術館や展覧会をめぐる新しい試みについてはこれからも随時誌面で紹介していきたい。

(O)

会員の呼称について

全国美術館会議（以下、「全美」という）の構成は、これまで美術館施設である会員及び賛助会員からなる組織としておりましたが、第 65 回（平成 28 年度）総会において、新たに「個人会員」の創設が承認されました。このことにより、会員の種別を整理し、これまでの会員については「正会員」と称することになりました（平成 28 年 5 月 26 日施行の全美規約に規定）。

この呼称の変更につきましては、「個人会員の創設について」の関連として、全美規約を第 65 回総会議事録、総会報告書及び全美ホームページ等に掲載し、お知らせしております。つきましては、本誌をはじめ、他の全美の印刷物等におきましても、今後は「正会員」の表記となりますのでご了承ください。

※参照（全国美術館会議規約抜粋）

第 2 章 会員

（会員の構成）

第 4 条 本会の会員は、正会員、個人会員及び賛助会員とする。

2 正会員は、美術館施設とする。

3 個人会員は、次のいずれかの該当するものとする。

- (1) 美術館施設に現在勤務又は勤務した経験を有する者
- (2) 大学の教員、又は元大学の教員であった者
- (3) 前 2 号に掲げる者と同等以上の知識を有していると会長が認めた者

4 賛助会員は、本会の目的に賛同し、その事業に協力しようとする団体とする。

『ZENBI』では、
次の要領で広く皆さんからの
原稿をお待ちしています。

- [原稿の内容] ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
・原稿には表題を付してください。
- [投稿の資格] ・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
・匿名の投稿は受けつけません。
- [投稿に係る詳細] ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。
- [締切] ・第13号(2018年1月発行予定)に関しては10月31日、
第14号(2018年7月発行予定)については4月30日を締切とします。(当日必着)
- [提出先] <メールの場合>
s-osaki@pref.tottori.jp (尾崎)
aoyama@ma7.momak.go.jp (青山)
<郵送の場合>
〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子
- [問い合わせ先] 内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議正会員職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されてないものに限る。
- (3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会(以下「部会」という。)に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いががが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

Optec Spotlight



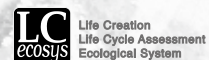
ERCO Optecは、美術館・博物館の照明に必要な機能と品質を全て持ち、さまざまな展示様式にも柔軟に対応することができるLEDを光源としたスポットライトです。

ERCO 独自開発・製造の最新型光学レンズシステムにより、作品のみをアクセント照明するスポット配光から、壁面を均一に照射するウォールウォッシュ配光、8m超の高天井の空間にも対応する高出力タイプまで幅広く品揃えされており、鑑賞者だけでなく運営者もストレスなく最高の光環境を構築できます。

ERCOでは長年にわたり培ってきた世界中の展示空間における経験をいかして、製品だけではなく、最適な照明ソリューションの提案をいたします。

ERCO

ライトアンドリヒト株式会社 〒105-0014 東京都港区芝2-5-10 TEL:03-5418-8230 / FAX: 03-5418-8238
※平成27年1月より社名変更しております(旧社名:エルコライティング株式会社)。



文化財と人と環境を第一に。

文化財保存分野に参入してから40余年、守り続けたものがある。

長年の経験と実績により、博物館・美術館等それぞれの施設環境に合わせた文化財IPM(総合的有害生物管理)プランをご提案いたします。

調査・診断

現状調査・診断/設計
原因究明・検査/分析

防除・メンテナンス

モニタリング
殺虫/殺カビ
IPM メンテナンス

その他サポート

教育研修支援
IPM 構築支援
関連商品販売

環境エンジニアリング 全国100事業所

IKARI **イカリ消毒株式会社** <http://www.ikari.co.jp>

本社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス | 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-4-8 TEL. 06-6264-2741 FAX. 06-6264-2740

丸栄堂

美術商

日本画・洋画・工芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8
TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<http://www.marueido.com>